リタの物語

朝靄(あさもや)の中に小川のせせらぎの音が響く。

リタは白く霞んだ小道を早足で進む。毎朝通っている道だから迷ったりしない。

小鳥たちのさえずりが聞こえる。蛙の声もする。

朝靄が濃く立ちこめているので、リタの服はすっかり濡れてしまった。髪の毛からも滴が落ちる。

仔鹿が道に駆け出してきてリタを驚かし、人の姿に驚いて駆け去る。

やがて森が開け、リタは泉に着いた。ふだんはありふれた泉だけれど、この時間には妖精が住んでいそうに見える。

早足で歩いてきたので、体が火照って汗が出ている。リタは泉の水を手ですくい一口飲んだ。さわやかな冷たさが口に広がり、喉を駆けおりた。

わたしは森の妖精、森の女王。

リタは空想する。朝靄がリタの空想を助ける。手を広げて、臣下の妖精たちに朝の挨拶を送る。それからドレスの裾をひるがえしながら、くるりとまわってみせる。

すると小鳥たちの声がリタの演技の称える。

さて、リタは我に返って静かに桶を泉に沈めた。泉が濁らないように、濁った水が桶に入らないように。

それから、よいしょと気合いを入れて一気に水のはいった桶を持ち上げ、そばの楡の木の枝に乗せる。一息ついてから、屈み込んで桶の下に頭を付けて立ち上がる。水を汲みに来る人がみんなその枝に桶を乗せるので、枝は曲がり桶の跡がついていた。

ゆっくりと歩いて家に向かう。小さな体に頭上の桶が重い。

水汲みの帰り道はあまり空想の余地がない。空想するにしても、可憐な妖精ではなく、ドワーフやゴブリンといった醜い生き物が浮かんで来る。

「おはよう、リタ。水汲みはもっと遅くてもいいのよ」

「お母さん、おはよう。朝の方が気持ちがいいから」

それに遅い時間になると村のみんなが次々と水汲みに来るので、一人で空想に浸っているわけにはいかない。村のおかみさんたちは泉の回りに腰を下ろして、どうでもいいような噂話ばか

りしているんだから。妖精たちだってそんなところには近づかないだろう。何より、朝一番の泉の水がきれいに澄んで冷たくておいしいのだ。
「お父さんのところにお水を持って行くね」
「あたしが朝飯の後で持って行くからいいよ」
「うん、でも、冷たいお水を飲みたいかも知れないし……」
「ああ、そうね。それなら持って行ってちょうだい」
リタは家の勝手口から出て、近くの鍛冶小屋まで水の入った桶を持って歩いて行った。いつのまにか朝靄は晴れて、夏の朝日が射していた。
金床をたたく音が調子よく響いていた。うるさいと思うこともあるけれど、リタはその音が好きだった。
鍛冶小屋の戸をあけると、途端に熱気が襲ってくる。そして金床を打つ音も大きく響き渡る。
リタのお父さんのガルムがシャツ一枚で仕事をしている。大きな体に汗が噴き出ている。
「お父さん、お水持ってきたよ。飲む？　冷たいよ」
「ああ、そいつはありがたい。ちょっと待ってな。ひと区切りつけるから」

リタはお父さんが仕事をしているところを見るのが好きだ。どろどろに溶けた赤い鉄が、お父さんの手によって鎌や鍬や鋤になっていく。魔法みたいだとリタは思う。

「ああ、うまいな。生き返るようだ。なにしろ、ここは暑いからな」

ガルムは桶から柄杓で水をすくって飲むとそう言った。それからもう一杯飲む。

「お前の汲んできた水は最高だよ、リタ。ところで、朝飯はまだかな？」

「もうすぐだと思う。お母さんが作ってたから」

「そうか、それじゃもう一杯水を飲むのはやめておくかな。じゃあ、飯までにもう一仕事するから、リタ、お前は母さんを手伝っておいで、朝飯が早く食えるようにな」

「うん、わかった」

リタはまた桶を下げて家に戻った。

リタの父、ガルムは鍛冶屋組合に所属する腕のよい職人である。独立してからは田舎の村に仕事場を構えているが、組合の他の職人の手に負えない複雑な細工仕事などをまわされることもあって、仕事には不自由していない。

もっともガルムの作る道具は滅多に壊れることがなかったし、包丁や鎌などの刃物も肉厚の刃で、ちゃんと研げばいつまでも使えるものだったから、この村では新しい仕事はあまりなく、ただ、結婚する時はガルムの道具を一揃い持たせてやれば一生使えるというありがたい噂が広まって、結婚式の前には急に忙しくなる。

リタの母は街のお針子仲間から「おっとりマルカ」と呼ばれるくらいものに動じない女性で、一方、「そそっかカリン」というあわてんぼうが彼女の親友であった。二人はお針子組合の設立を企てたという疑いをかけられ、実際にはお針子の待遇改善運動だったのだが、罪には問われなかったものの二度と針を持たないと誓うことになった。

そもそも組合組織の素晴らしさや互助方式などをマルカに吹き込んだのがガルムなのである。その頃、ガルムはおっとりマルカにベタ惚れで、なんとか歓心を買おうと懸命になっていて、ふとマルカが漏らしたお針子の待遇の悪さに憤然として、鍛冶屋組合ならそんなことはないと説きはじめ、よい環境で仕事をしてこそ出来の良い製品が作れるのであって、劣悪な環境ではど

んなに優れた腕の持ち主でもよい品物は作れないのだと結論したのである。
一緒にお茶を飲んでいたそそっかカリンが、その後ただちにお針子の待遇改善を訴えはじめたのは、彼女の性格からして当然のことであった。そしてことが大げさになって領主の弾圧を受けそうになったところを、なんとか押さえたのがおっとりマルカで、処分をカリンとマルカだけに限定した上に、最小限の範囲ながらお針子の待遇改善まで獲得したのである。
ガルムが責任を感じてすっかりしょげていると、いいのよあたしは結婚したらお針子はやめるつもりだったんだから、誰か稼ぎのいいひといないかしらと誘いをかけて、ガルムのプロポーズを引き出したところもマルカがただ者ではないことを示している。
そそっかカリンも今は街の宿屋で働いていて、気風(きっぷ)の良さで酔っ払い連中に人気がある。今の呼び名は「壊し屋カリン」、毎日何枚皿を割るか、賭けの対象になっているという。胴元は宿屋の親父だから案外儲けになっているのかも知れない。
朝ごはんを食べ終えると、リタはお使いに出

かけた。お母さんにお菓子を焼いてもらうので、その材料を買ってくるのだ。

最初はゴパ小父さんの家で山羊の乳を瓶に一杯入れてもらう。ゴパ小父さんの家は、村の西側で、リタの家から泉までの道の途中にあった。今朝通った幻想的な道は、日が高く登った今では、轍の跡の間に雑草の茂った平凡な道になっていた。

空き瓶を持って行って、そこにお乳がたくさん入れてある大きな桶から、柄杓（ひしゃく）ですくって入れてもらうのだ。けれど、その日はゴパ小父さんは寝坊して、まだ山羊の乳を搾っていなかった。

「ああ、待っといで、待っといで、すぐに搾ってやるともさ。リタはお乳を待っている。雌山羊はじいさん待っている」

ゴパ小父さんは歌うように節をつけて喋ると、家畜小屋から山羊を連れ出して杭に繋いだ。

ゴパ小父さんは白い顎髭を伸ばしている。そうすれば山羊とそっくりになって、悪者が山羊を盗みに来ても小父さんと山羊とどっちが本物の山羊なのか区別がつかなくなって困るからだという。

小父さんは山羊のそばに座り込むと、濡れた布

でおっぱいの周りを丁寧に拭いた。
「お待たせしました、リタさんよ、その瓶ちょっと貸しとくれ」
リタが空き瓶を渡すと、ゴパ小父さんはその中に直接山羊の乳を搾り出した。瓶が一杯になるときゅっと蓋を締めた。
「おいしいチーズはどうですか、伝えておくれよ、母さんに」
「わかりましたわ、ゴパ小父さん」
なぜかリタの口調にも節がついてしまった。
ゴパ小父さんの山羊の乳は月極めでお金を払うことになっているので、リタは支払いをしないで次の家に向かった。
鶏を飼っているのはキリカ小母さん。
キリカ小母さんの家は、村の野原側、村人の多くが畑を持っている方にあった。それでリタは小川に掛かった小さな石の橋を渡って、キリカ小母さんの家に向かった。
「お菓子かい？　オムレツかい？」
リタの顔を見るなり、キリカ小母さんは尋ねてきた。
「お菓子を焼いてもらうの」
「よし、大当たりだね。卵ならいくらでも持って

行くがいいよ。その代わりお菓子が焼けたらおくれ、一切れでいいんだよ」
キリカ小母さんはお菓子が大好きなのだ。もっともお菓子の嫌いな人なんているわけがないけれど。リタはキリカ小母さんから卵を五つもらった。
それでリタのお使いは終わった。

それからリタはお母さんがお菓子を焼く手伝いをした。リタはお菓子を食べるのも好きだけれど、お菓子を焼くのも同じくらい好きだ。
お母さんもお菓子を焼くのが大好きで、ふたりで一緒に小麦粉をふるいにかけたり、生地を煉ったりしていると、なんの歌だかわからない鼻歌が出てきてしまう。それだけでなく、首をふったり足踏みしたりして、踊り出したくなってしまうくらいだ。
今日のお菓子は、ローズマリー入りの丸い焼き菓子。リタも手の平の上で生地をころころと転がして丸い形をつくった。そうして出来た丸い生地をいくつも台の上に乗せて、二人は鍛冶小屋に向かった。
マルカは結婚後、ガルムの鍛冶に使う炉を見る

と、この横に竈を作れば炉の熱でお菓子が焼けるわよとガルムを説得した。そんなものを作ってよいとは鍛冶組合は認めていないのに、作っていけないという決まりもないでしょとガルムを言いくるめて竈を作らせてしまったのだ。

だからガルムが鍛冶の仕事で炉に火を入れている間は、マルカはお菓子を焼き放題、リタはお菓子を食べ放題ということになったのである。

竈に生地を入れると、後は焼き上がるまで待つだけなので、本当に踊りでも踊ってしまいそうになるリタだったけれど、そこはお父さんの仕事場で、お父さんが汗を流しながら働いているから、さすがに踊るわけにはいかなかった。

マルカの焼くお菓子は村でも評判で、リタが欲しい人には届けてあげているのだけれど、それも待ちきれずに、世間話を装いながらリタの家に尋ねてきてお菓子を貰っていく者もいる。

そのお礼として、野菜や小麦粉や卵や時には塩漬け肉なども貰えたから、家計には結構役に立っているのだった。

お菓子が焼き上がると、マルカはふうふうと息を吹き掛けて、一つだけ先に冷ました。

「はい、竈を作ってくれてありがとう」

そう言って、マルカは冷ましたお菓子をお父さんの口の中に押し込んだ。
「ああ、うむ」
お菓子を口の中に入れたまま、よくわからない言葉を出すお父さんを見ていると、リタも誰かの口の中にお菓子を押し込んでみたい気になってくる。

しかし、リタにはお菓子よりも大切なことがあった。
いつもなら、冷めるのを待ちきれずに口に入れるお菓子だけれど、今日はおとなしく台所の椅子に座って、お母さんがお菓子を包んで手さげ籠に入れてくれるまで待っていた。
「ひとつ食べなくていいの？」
「いいの、お話を聞きながらみんなと一緒に食べるから」
今日はこれからカラタ姉さんのお話会があり、子どもたちや暇な老人などが集まって、お話を聞いたり、お茶を飲んだり、お菓子を食べたりするのだ。
カラタ小母さん家は村のずっと奥の泉の先の森の中なのだけれど、子どもたちが森で迷うとい

けないからと、村の中央の共同集会所でお話会は開かれる。
　リタが集会所に着くと、サラが家からお茶のポットを持って出てきた。集会所はもとは村長の家の物置だから、つまりはサラの家の物置なわけで、お茶を暖かいうちに運んでくるには都合がよい。
　カラタ姉さんはまだ来ていなかったけれど、子どもたちはリタやサラを含めて揃っていて、もともとお話会になんか全然興味がない腕白な男の子を除けば、じっとおとなしく話を聞いていられるくらい大きくて、大人の仕事をするにはまだ小さい子どもたちはほとんど集まっていた。
　小さな村だから子どもたちは十数人で、そこに暇な大人が二、三人というのがいつものお話会であった。ところが、今日はどういうわけか、大人が六人もいて、リタはちょっと困ってしまった。お菓子の数が足りないのだ。
　集会所に来る前に、キリカ小母さんに二つ、ゴパ小父さんに一つあげて来たので、今朝焼いた分は残っていないし、もちろんこれからお菓子を焼く時間はない。
「なんだい、どうしたんだい、お菓子が足りな

いって言うのかい。あたしゃ、お菓子が出るって言うから、ここに来たっていうのにねぇ。だいたい、リタは家で焼きたてを食べてきたんじゃないのかね、毎日お菓子ばかり食べているから、そんなに太ってしまうんだよ、そんなにまるっこかったら、歩くより転がった方が速そうじゃないか」

「そうなの、実は誰も見ていない時は、歩かずにころころと転がっているの、でもそうすると服が汚れちゃうのよね」

リタはそう言って、服の端をパンパンとたたいて埃を払う振りをした。

「どうしたの」

ようやく到着したカラタ姉さんは、お菓子が足りないと分かると、あたしの分はいらないわ、話しながら食べることは出来ないからと言った。

「だめ、絶対だめ。あたしは食べてきたからいいの」

リタは慌ててそう言った。カラタ姉さんがお菓子を食べられないなんて、そんなこと絶対に間違っている。それくらいだったら、自分のお菓子がない方がずっといい。

お菓子の問題が片づいたので、サラがお茶を注

いでまわり、お話会を始める準備が出来た。

そしてカラタ姉さんは語りはじめた。

光り輝く妖精の国。そこに住むそれぞれに美しい様々な妖精たちをカラタ姉さんは細かく描写した。偉大な妖精王はその力と威厳で本来は身勝手な妖精たちを見事に統治していた。

しかし若い仔鹿の精バックは妖精王を心の中では尊敬しながらも、反抗的な態度を取るのであった。バックは悪戯を繰り返し、王宮の見事な彩色の花瓶をみんな割ってしまったり、四季の花が咲き揃う庭園の花壇を踏みにじったりした。

カラタ姉さんはバックの悪戯の数々とその結果バックが受けたお仕置きを次々と語って聞かせた。バックはいくらお仕置きを受けても平気でまた悪戯を繰り返すのだった。

しかしついにバックは許されない悪戯をしでかしてしまった。邪悪なドラゴンの封印を解いてしまったのだ。妖精王はバックにお仕置きをしなかった。その代わりに妖精の国から人間界に逃げ出したドラゴンを追いかけて再び封印するようにバックに命じたのである。自分のしたことは自分で決着をつけろということである。

バックはドラゴン退治のために妖精の宝物倉から鎧や盾や剣の武具一式を貸し与えられる。どれも魔法の力を秘めた品物ばかりである。カラタ姉さんは妖精の宝物倉にある数々の魔法の品々を説明した。

バックが人間界に行くと、その地域では既にドラゴンが暴れた後であった。煙を上げる店の残骸を前に呆然と立ちすくむ商人や、引き裂かれて殺された母親の死骸に泣きすがる男の姿があった。

そしてドラゴンに攫われた美しい婚約者を追いかけて鈍（なまくら）な剣と割れた木の盾を装備に旅に出ようとしている若者がいた。バックは親の敵を討つためにドラゴンを追いかけていると偽り、その若者と共に旅をする。

カラタ姉さんはその旅の様子を細かく描写した。ドラゴンの炎に焼かれた村や、妖精の国には及ばないけれど美しい森の陽射しや小鳥の声。そして汗を流して働く人間の姿。酒場の賑わい。

二人は長い旅の末についにドラゴンに追い付き戦いを挑む。その戦いの様子をカラタ姉さんは勇ましく語った。二人は何度もドラゴンの炎に焼かれたが、その度に妖精の国の魔法の品物

で命を救われた。そして少しずつドラゴンに傷を負わせていった。
そしてついに二人はドラゴンを倒し、若者は婚約者を取り戻した。バックはドラゴンが復活しないように封印し、妖精の国に戻った。そして二度と悪戯をしなくなった。

「はい、今日はここまでですよ」
カラタ姉さんはそう言って立ち上がると、パンパンとスカートを叩いてお菓子のくずを落とした。
子どもたちがまだお菓子の残りを食べたり、ドラゴンや妖精について話し合ったりしている間に、リタとサラでお茶の道具を片づけ始めた。二人はカラタ姉さんから、お話の仕方を教わることになっていた。
二人ともそろそろ将来の職業のことを考えなければならない年齢に近づいていたが、まだ真剣には考えていなかった。お話を教わるのも、物語りを職業にしたいからというよりは、他の子どもたちよりも早く新しいお話が聞けるからという理由の方が大きかった。
サラの家の台所で茶碗やポットを洗っている

と、サラのお母さんが奥から出てきて、茶器の片づけを手伝ってくれた。
「今日はどんなお話だったの？」
「妖精とドラゴンの話よ、お母さんも一緒に聞けばよかったのに」
「お姫様の出てくる話だったら聞いてもいいけどねぇ」
「あたしはドラゴンの方が好きよ。リタは？」
「どっちも好き」
「そんなのずるい」
サラがふざけて水を掛けたので、リタは首をすぼめた。
「はい、はい、お茶碗割らないでね」
それからは二人ともまじめに洗い物をしたので、すぐに片づいた。
「じゃあ、カラタ姉さんのところに行ってきます」
「暗くなる前に帰るんですよ」
サラのお母さんに見送られて、リタたちは待っていたカラタ姉さんと一緒に森に向かった。
泉までは開けた道が続いているが、その先は通る者も少ないので道はずっと狭くなっていて、森の木々が大きな枝を張り出して、薄暗い陰を落としている。足元の草も踏みしだかれてはい

るものの、時々大きな茂みを作っていて、躓きそうになる。
「こんな森の奥じゃなくてもっと村の近くに住めばいいのに」
サラがさっそく不平を言いはじめる。
「だって、空き家があったんですもの。それに森は物語の宝庫なのよ」
「こんなところに誰が住んでいたのかしら」
「さあね、でもしっかりしたいい家よ。不埒者が来ても簡単には入れないわ」
実際、カラタ姉さんの家はなかなか立派なものだった。石造りで大きな樫の扉がついていた。周りの木は昔切り倒されたのか、古い切り株がいくつか残っていて、そこからは新しい木の枝が伸び始めていた。開けた空からは光が射していて、薄暗い森の中でそこだけ目立って明るくなっている。
「泥棒だってわざわざこんなところまで来ないと思うわ」
「そうね、そうだといいんだけど。さ、入って」
「おじゃましまーす」
家の中は薄暗くて、足元もはっきりとは見えなかった。そんなことはものともしないで、カラ

タ姉さんが素早く走り回って、窓を開けると急に室内が明るくなった。
「さて、お湯を沸かさないとね。その辺に座って頂戴」
「お茶ならいらないわよ、ねえリタ。さっきたくさん飲んだし」
「そういう訳にはいかないのよ。お話をする時にはお茶が必要なのよ。ビールでもいいけど、あなたたちにはまだ早いと思うから」
「じゃあ、今のうちにトイレを借りようかしら」
「もうリタったら」
お湯が沸くとカラタ姉さんはお茶をいれ、干杏の砂糖漬けを出した。
「お菓子もお話には必要なのかしら」
「そのとおりよ」
それからカラタ姉さんは、お話を始めた。

周囲を頑丈な城壁に囲まれた街の中で、数々のきらめく宝石を身につけた淑女たちが、笑顔もまぶしい長身の騎士からダンスの誘いを夢見て集う舞踏会で、ダンスの合間の余興に呼ばれた道化師が、際どい警句を言い過ぎて買ってしまった領主の不興を晴らすために、ひとつ二つ三つ

とボールや燭台や手鏡を空中に投げ上げてお手玉を披露している傍らで、はるか彼方の異国より取り寄せられた黒猫が、色とりどりの花々がきれいに描かれた絵皿から、恋の憂いもまだ知らぬ幼い乙女がその朝に絞った甘い牛乳を、ペロペロ舐めている様子。

千の燭台に万の蝋燭の灯る絢爛豪華な大広間で、戦争の賠償金の代わりに貰われてきた異国の高名な料理人が、奇妙な言葉を叫びながら包丁をふるって、獰猛な獣や真っ赤な羽根の鳥、ぎろりと睨む目玉の不細工な魚を材料に、大鍋大竈で煮たり焼いたり調理した得体の知れない香りの漂う料理の数々の並ぶ大テーブルを前に座っているのは、密かに領主の暗殺を企んでいるに違いないという噂の大臣や、四方の国にその美貌を知られた領主夫人と隙あらば密通しようとお洒落に余念のない旅の吟遊詩人、古びた羊皮紙の誰にも読めない文字を根拠に古代の高貴な血筋の系図を捏造する学者ばかりで、忠義の騎士はお姫様が夢に見たという黄金の薔薇の髪飾りを求めて探索の旅に出て不在。

あちこち破れて穴だらけの薄汚い布を何枚も重ねてなんとか雨露をしのぐ天幕の中の暗く陰った

片隅に、百年を越えて生き長らえた老人のような叡智と狂気を同時に宿した瞳を備え、唇は赤く艶やかに娼婦の技巧を思わせる舌を時折のぞかせる口から漏れる言葉は破滅と病と死ばかりの占い師の指し示す、得体の知れない動物の血が赤黒く染みついた搭の描かれたカードの意味を誘導されるままに都合よく解釈している婚礼を明日に控えた無垢な花嫁。

新月も間近に迫った夜の帳がいよいよ深く街を覆えば、燃やすたびに大量の煤と臭い匂いのする安い蝋燭も買えずに、暗くなったら寝るより他に仕方のない貧乏家族が城壁に寄りかかるように軒を連ねて建ち並ぶ街の外れの暗がりの中に、一軒だけ厚く下ろしたカーテンの内側で密かに灯るランプの明かりに照らされる四、五人ばかりの怪しい男の口元から漏れる辺りをはばかるささやき声を聞いているのかいないのか、部屋の隅のベッドの上に座って片方の肩を壁に持たれているのは、流れる金髪が腰まで届き、勇猛果敢な船乗りたちが何より恐れるサルガッソーの海のすべてを引き込む深淵よりも暗い青色の瞳をした、顔の輪郭にはまだ幼さを残してはいるものの強く布で締めつけても隠しきれない胸

の膨らみは紛れもなく女と分かる剣士。
代々当主のみに極秘で伝えられた蒸留法で特別に作られた喉も焼ける火酒を、酒量ばかりが誇りの腹の突き出た赤鼻の大臣が下戸の騎士をからかって無理に勧めて酔い潰し、揚げ句は自分も酔いつぶれ、ふらつく足取りで割り当てられた客室がどこかをおぼろに思い出しながら、城の廊下をさ迷うその耳に響くのは、朝に夜にと時を知らせる城内の鐘が、非常警報を告げて時ならぬ響きを上げる合間にも、曲者曲者と呼び交わす警備兵の声に、慌ててあたりを見渡せば、白みはじめた夜明けの空に黒く聳える尖塔の合間を走りぬけていく影がひとつ二つ三つ。
売り子の客を呼び込むかけ声や値切る客との駆け引きの声まで押し合う市場の中で、どうして紛れ込んだのか恰幅のよい紳士が身動きが取れなくなって汗を拭いている脇をすり抜けて巧みに人ごみの中を走り抜けていく少年掏摸の毎日母の墓前に供える一輪の花を買う憧れの花売りの少女が、その朝おんぼろ屋根の隙間から投げ込まれていた一枚の金貨をお守りの袋に入れて肌につけ、顔も名前も知らないながら無事を祈る義賊の活動に業を煮やした王宮警備隊が情

報を求めて密告を勧める立て札の前で、王や貴族の横暴をなじる群集に混じって、ひとり密告の報酬で赤ん坊にミルクを買ってやろうと企むやもめ男。

やがて日が傾きはじめ、部屋の中が少しずつ暗くなってきた。

「さあ、今日はここまでにしましょ」

すっかりお話の世界に入り込んでいたリタとサラは、それがお話を中断する言葉だとしばらく理解出来ずに、次の言葉を待っていた。

「さあ、暗くならないうちに帰らないと」

そこで初めて二人は現実に帰った。

森の奥のカラタ姉さんの家は木々に囲まれて、薄暗くなっていたが、泉までくるとまだ足元もはっきり見えるくらい明るかった。そこでサラと別れてリタはひとりでいつもの道を通って家に向かった。

ひとりで道を歩いていると、リタはいまカラタ姉さんから聞いたばかりのお話のことを考えずにはいられなかった。これまでカラタ姉さんから聞いた話は、みんな妖精や小人といった空想上の生き物が出てくる話ばかりで、王様や貴族

が出てくる話は初めてだった。
　リタはもちろん、妖精や小人の話が好きだったけれど、今の話を聞いてみて人間の話もすごく面白いことに気がついた。王宮や舞踏会などは妖精の国と同じように遠い世界のことに思えたが、陰謀や密告には胸がどきどきした。
　上の空で歩いていたので、リタは向こうから人が来るのに気づかなかった。すれ違う直前になってようやく気がついた。村外れで豚を飼っているペタニ小母さんだ。
　ちょうど木の枝が道に張り出していたところで、ペタニ小母さんは、通行の邪魔にならないようにその枝をポキッと片手で折っていた。ふだんから太った大きな豚を小屋に追い込んだりしているだけあって力はたっぷりある。
「こんばんは」
「ああ、リタ。いま、お前さんの家に行ってきたところさ。ちょっとマルカに相談があってね。いまお帰りかね。お使いかい？」
「ううん、カラタ姉さんのところでお話を聞いていたの」
「ああ、こう言っちゃなんだが、あたしはあの女はどうも好きになれないよ。得体の知れない

ところがあるからね。確かに面白い話をするが、どこまで本当なんだか。だいたい、あの女はどうやって生計を立てているんだい。畑も耕さないでさ」
「きっと街にいた時に、お話をしてお金を貰っていたんだわ。吟遊詩人みたいに。その蓄えがあるのよ」
「お話なんかに金を払うやつがいるもんかねぇ。それに吟遊詩人はお話に出てくる嘘の職業だろう」
「あたしが王様なら喜んで払うわよ。吟遊詩人もちゃんといるもん」
「まあいいけどね。汗水流して働くことを忘れたらいけないよ。前に豚飼いになりたいって言っていたのはどうしたのさ」
「だって、豚が全然言うことを聞いてくれないんだもの」
「ああ、そうだったねぇ。お前さんは豚に甘いからねぇ」
「羊ならいうことを聞いてくれるかも知れないと思ったんだけど、羊飼いには三人も息子がいるでしょ。全然、お呼びじゃないのよ」
「じゃあ、マルカにお裁縫を習ってお針子になったらどうだい」

「お母さんは針を持たないって誓ったから、教えることも出来ないのよ。それにまだ街には出たくないわ。いずれは行って見たいけれど。それにもちろん、お父さんの鍛冶屋を継ぐのは無理だわ」

「確かにいくらお前さんが御転婆でも、鍛冶屋はちょっと無理だろうな」

「そうなの、このあいだこっそりハンマーを持ち上げようとしたんだけど、もう両手で持ってもふらふらしちゃって。お母さんからお菓子の焼き方を教わっているから、お菓子職人になろうかとも思うんだけど、組合に入っているお菓子職人ってこのへんにいないでしょ。農家のおかみさんになるという手もあるけど、このへんで独身の農家と言ったら、あのノラムだけだし。それはちょっと嫌だわ」

「はっはっはっ。まあゆっくり考えるがいいよ」

話をしているうちに暗くなってきたので、リタはペタニ小母さんに別れを告げて家に向かって歩きだした。

その時、小石を踏んで足が滑った。そしてそこに突き出していた折れた木の枝に顔を突っ込んでしまった。

「おい、リタ。大丈夫かい。おい」
リタはうめき声を上げるだけだった。ペタニ小母さんはその大きな体でリタを抱えると、リタの家に走った。
「くそぉ、あたしが枝を折ったりしなければ……」